台大日本語文研究第 38 期
2019 年 12 月，頁 1-25
2019-09-04 收稿，2019-12-02 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201912_(38).0001

《宇津保物語》中音樂所形成的友情共同體

賴振南*

摘要

日本平安時代物語作品中的求婚譚，自物語之祖《竹取物語》起，就被視為重要的物語結構和主題，發揮著作用。在《竹取物語》中「被稱為風流多情之士的五位王公貴族」，其社會地位和身分等，雖分別都被高度評價，但他們卻是平行地出現在作品中，彼此之間全然毫無關聯，個別是向輝夜姬求婚後，以失敗結束的人物造型。一般認為《竹取物語》是短篇物語結構，在故事情節的展開上，不僅鮮少有登場人物間的橫向聯繫，圍繞在輝夜姬身旁的求婚者們也未被創造出複線關係。

透過《宇津保物語》中的眾多登場人物以及琴的強烈媒介角色之間的協同演出效果，清楚看得出物語的縱向關聯和橫向關聯交織成的對比複線結構。根據拙稿的考察，在這個縱、橫網絡中的俊蔭一族四世代的血脈關聯，以及多數的秘琴和秘曲的代代傳承過程，除了形成強固的家族共同體外，男女人物之間也藉由琴的音色共譜織成了「音聲共同體」=「愛的共同體」。繼男女人物之間的「音聲共同體」論述之後，想考察如何透過音樂形成友情共同體。特別是，與俊蔭一族同樣，擁有由彌行從中國唐朝攜回日本的秘琴和以及秘曲傳授的源涼，在與藤原仲忠的交流中，透過秘琴傳授的相互吸引的形式，音樂如何形成兩人最佳友情共同體，其中原委值得探究。

關鍵詞：琴、音樂、藤原仲忠、源涼、友情共同體

* 天主教輔仁大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Friendship Community Based on Music in *Utsubo Monogatari*

Chen-nan Lai *

Abstract

Since The Tale of the Bamboo Cutter (Taketori Monogatari), courtship stories have long played an important role in the structure and theme of monogatori (tale or narrative) of the Heian Period in Japan. In The Tale of the Bamboo Cutter, the five princes and nobles known for their flirtatious behavoir, share high social status, but each appear individually in the work, without any connection amongst themselves. Each one of them are characters who have failed in their proposals to Kaguya. The Tale of the Bamboo Cutter has a short story structure. In the development of the storyline, not only are there few horizontal links between the characters, but the suitors around Kaguya do not create a double track relationship.

Through the synergistic performance between the many characters in the Utsubo Monogatari and the significant role of the Koto, it is clear that the vertical correlation and horizontal correlation of the story are intertwined into a complex double track structure. According to the investigation of this study, the bloodline of the four generations of the Toshikage family in this vertical and horizontal network, including the inheritance of hikin (secret kotos) and hikyoku (secret pieces of music) from generation to generation. In addition to the formation of a strong family, the men and women also form a “Community of Sounds” and a “Community of Love”. Following the discussion on the “Community of

* Professor, Department of Japanese at Fu Jen Catholic University, Taiwan.

臺灣大學學術期刊資料庫

Sounds” between men and women, this study intends to explore how a community of friendship is formed through music. In particular, similar to the Toshikage family who were also in possession of two secret kotos and secret pieces of music (brought back by Iyayuki from the Tang Dynasty in China), Suzushi and Nakatada further engaged in exchanges on secret songs. This study will explore how music serves as the best friendship community for Suzushi and Nakatada.

Key words: Koto (Kin), Music, Fujiwara no Nakatada,
Minamoto no Suzushi, Community of Friendship

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』の音楽による友情共同体

賴振南*

要旨

平安時代の物語における求婚譚は物語の祖の『竹取物語』から重要な物語構造及び主題としての役割を果たしている。『竹取物語』における「色好みといはるるかぎり五人」は、それぞれに社会地位や身分などが高いにもかかわらず、物語の中に並行的に登場し、互いには関わることなく、かぐや姫への求婚が失敗に終わるという人物造型になっている。『竹取物語』は物語上の展開において人物の横の連繋が少なく、かぐや姫をめぐる求婚者たちの複線関係が創造されていない短編的物語構造になっていると思われる。

これに対し、『うつほ物語』は、多くの登場人物と琴を強い媒介とする相乗的な演出効果によって、物語の縦の繋がりと横の繋がりという対比複線構造がはっきりしている。拙稿の考察によると、この網脈の中における俊蔭一族四代の血筋の繋がりと、多数の秘琴と秘曲の代々の伝承によって家族の共同体が強固に形成されていくほか、琴の音色によって男女間の「音声の共同体」＝「愛の共同体」も織り成されていくのである。更に男女間の「音声の共同体」と同時に、音楽による友情共同体が如何に形成されていくかを考察したい。とくに俊蔭一族と同じく、弥行が中国の唐時代に持ち帰った秘琴と秘曲とを擁する源涼の秘琴伝授も呼び寄せる形で、音楽による藤原仲忠と源涼の最高の友情共同体が形成される経緯を究明したい。

キーワード：琴、音楽、藤原仲忠、源涼、友情共同体

* 輔仁大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』の音楽による友情共同体

賴振南

一、

平安時代の物語における求婚譚は物語の祖の『竹取物語』から、重要な物語構造及び主題として役割を果たしている。『竹取物語』における「色好みといはるるかぎり五人」は、それぞれに社会地位や身分などが高いにもかかわらず、物語の中に並行的に登場し、互いには関わることなく、かぐや姫への求婚が失敗に終わるという人物造型になっている。『竹取物語』は物語上の展開において人物の横の連繋が少なく、かぐや姫をめぐる求婚者たちの複線関係が創造されていない短編的物語構造になっていると思われる。

『竹取物語』の五人の求婚者たちは、身分、境遇、性格などの特質や風雅な趣味を持っているうえに、積極的な求婚行動も実行している。社会的な地位から見ても、この五人の求婚者は、一方では、政界、社交界の最高の成員であり、他方では、当時最高の文化人である。この貴紳たちの条件からすれば、彼らの求婚は当時の女性にとって拒否しがたいものであると考えられる。しかし、各々並行的にかぐや姫をめぐる求婚譚に登場し、互いに関わることのないまま、あえなく求婚に失敗する男性人物として造型されている。『竹取物語』は物語の展開において人物の横の連繋が少なく、かぐや姫をめぐる求婚者たちの複線関係が創造されていない短編的物語構造になっていると思われる。

同じく平安時代初期に成立した『伊勢物語』は、各段が歌を中心とする歌物語だが、全体的には在原業平と思われる男の恋の一代記という構成になっている。しかも、男女間の恋愛だけでなく、親子愛、主従愛、友情、社交生活なども描かれる多主題物語である。また、作中紀氏との関わりの多い人物が多く登場する事でも知られる。在原業平は紀有常（実名で登場）の娘を妻としており、その有常の

臺灣大學學術期刊資料庫

父紀名虎の娘が惟喬親王を産んでいる。その婚姻関係によって友情を築いた描写は以下の『伊勢物語』第十一段[1]からうかがえる。

> むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。
> 忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

男女間の恋の物語のイメージが強い『伊勢物語』であるが、実は友情についても書かれている。主人公は恋愛沙汰から政治的地位を失い、失脚するが、もし彼が友情に厚い男でなかったら、ここまで、その歌が人々の賞賛を集めることはなかったのではないか。「みやび男」は、「男同士の友情」も大切にする一面も有していたと言えよう。

『伊勢物語』における友情は、作中優曇華の花に擬えられているが、物語における男女愛のほかに、男同士の友情結成の過程も、物語に厚みを持たせる上で、重要な役割を果たしているのである。

『源氏物語』に先行する、二十巻に及ぶ長編物語『うつほ物語』[2]は、従来秘琴伝授をめぐる「純乎芸術、音楽、琴を主題とした芸術至上主義の文芸作品」[3]・「音楽小説」[4]・「饗宴・祝祭の文学」[5]などと捉えられてきた。その冒頭巻「俊蔭」からは、確かに琴の宗教性、神秘性、倫理性といった主題が読み取れる。しかし、同時に「俊蔭」巻には、俊蔭の漂流譚と秘琴伝来話が描かれていることも見落とす

---

1 片桐洋一、高橋正治、福井貞助、清水好子　校注・訳（1994）『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館。p.124。用例検索は. データベース「新編 日本古典文学全集」（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+）http://www.jkn21.com/koten/displaymain に拠る。

2 テキスト：中野幸一　校注・訳『うつほ物語①』（1999）、『うつほ物語②』（2001）、『うつほ物語③』（2002）、新編日本古典文学全集 14～16、小学館 以下の引用は、「巻名」ページ数（例：「俊蔭」p.31）で表記する。用例検索は. データベース「新編 日本古典文学全集」（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+）http://www.jkn21.com/koten/displaymain に拠る。

3 河野多麻（1959）「解説」『宇津保物語一』日本古典文学大系岩、波書店、p.8

4 中村真一郎（1959）『色好みの構造――王朝文化の深層――』岩波書店、p.46

5 三谷栄一（1976）「宇津保物語　総説」『鑑賞日本古典文学第 6 巻　竹取物語・宇津保物語』角川書店、p.241 下

臺灣大學圖書館

ことはできない。全体を俯瞰すれば、『うつほ物語』における秘琴と秘曲は、呪術的力を保ち続けているばかりではなく、琴の音色の文芸化を図りつつ、人間関係の理想像を描くところにこそ、その真の主題があるのではないだろうか。つまり、『うつほ物語』は、琴を弾く音声を物語的構造の素因とし、距離を無化して家族間、男女間、友情間の共同体の形成を有効的に機能させ、人間共同体の理想像を描いた物語と見ることも可能かと思われるのである。

『うつほ物語』は、多くの登場人物と琴を強い媒介とする相乗的な演出効果によって、物語の縦の繋がりと横の繋がり[6]という対比複線構造がはっきりしている。『うつほ物語』は俊蔭秘琴一族の首尾一貫したプロットが、物語としての統一感・整合性を際立たせるほか、あて宮求婚物語や、立太子をめぐる政争物語などが物語に厚みを与え、行事、遊宴の細叙や和歌の群作、会話や消息文の多用等々による写実的な特色ある叙述も、この長編物語が獲得した構造的特色として看過できない。さらに、あて宮の求婚者たちの多様な性格づけ、人物造型や人物関係などが、『竹取物語』にはなかった人物同士の縦横的複線関係となっている。とくに、あて宮の十数人もの求婚者たちの中で、音楽を媒介として結成された、仲忠を中心とする友情関係は従来は必ずしも注目されてこなかったが、『うつほ物語』における俊蔭一族四代の血筋の繋がりと、多数の秘琴と秘曲の代々の伝承による家族の共同体、琴の音色による男女間の「音声の共同体」＝「愛の共同体」[7]の形成は重要である。親子間、男女間の「音声の共同体」に続き、音楽による友情共同体が形成されていく過程は、長編物語としての『うつほ物語』の見所の一つであり、更に俊蔭一族と同じく、弥行が中国の唐時代に持ち帰った秘琴と秘曲とを擁する源涼の秘琴伝授も呼び寄せる形で、音楽による藤原仲忠と源涼との関係性が、友情共同体の最高峰として描かれる経緯を究明したい。

---

6 猪川優子（1997）「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉―「繋がり」の形成をめぐって―」『古代中世国文学』9号、広島平安文学研究会、p.1-8

7 拙稿（2018）「『うつほ物語』における琴による共同体の形成」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 36 期、pp.1-24

臺灣大學日本語文學系

二、

いわゆる正頼系物語を中心とする「藤原の君」巻と継子譚である「忠こそ」巻を除けば、二十巻に及ぶ長編物語『うつほ物語』の全編にわたる、秘琴一族として秘曲を伝える役目を果たす藤原仲忠は、物語の核となる男主人公である。俊蔭秘琴一族物語は勿論、あて宮をめぐる求婚物語にしても、立太子をめぐる政争物語にしても、仲忠はあて宮と互いに照らし合い、輝き合う役割を担う主要人物である。あて宮の魅力は、

> なほ見れば、あるよりもいみじくめでたく、あたり光り輝くやうなる中に、天女下りたるやうなる人あり。仲頼、これはこの世の中に名立たる九の君なるべし、と思ひ寄りて見るに、せむ方なし。(「嵯峨の院」p.358)

と、仲頼があて宮を垣間見る場面から分かるように、まるで地上に降り立った天女のように描かれている。その姿は『竹取物語』のかぐや姫の外見を髣髴させ、輝いていると表現されている。

一方、仲忠は俊蔭の孫であり、俊蔭が波斯国へ漂流している間に天女から与えられた、「この山の族七人にあたる人を、三代の孫に得べし」(「俊蔭」p.37)という予言の子である。さらに俊蔭の娘は、若子君(後の藤原兼雅)と琴を媒介にして一夜の契りを交わし、仲忠を身ごもり、出産する。その後は親子が不遇の生活を送るが、仲忠は孝の精神で、母の食料を調達するなどして日々を送る中、「容貌は、日々に光るやうになりゆく。見る人、抱きうつくしみて」(「俊蔭」p.72)人に好かれている。親子二人の生活が次第に周囲の人々に知られるようになったため、仲忠は母を連れて、北山に入る。杉のうつほに住んでいた熊に孝の子であることを涙ながらに述べ、感動した熊によりうつほを譲られ、住処として移り住む。その聖なる空間であるうつほで、仲忠は母俊蔭の娘から秘曲を伝授される。仲忠は

臺灣人學學術期刊資料庫

生い立ちが伝奇的で中国の孝行説話の影響もあり、「容貌は光る」ばかりではなく、神仏が仮に人の姿となった「変化の者」(「俊蔭」p.74)でもある。

そのようにして仲忠が十二歳になった年のある日、すでに右大将になった兼雅が帝の行幸のお供で「うつほ」の山に来ていて、遠くから兄弟と一緒に俊蔭の娘が弾く琴の響きを聞き取り、その音色に誘われ、一人で山奥に入って昔の女とめぐりあう。兼雅は俊蔭の娘と仲忠を引き取り、都にある三条堀川の邸へ迎えた。それから俊蔭の娘一人を愛するようになったほか、仲忠には琴以外の楽器や学問を習わせ、上流貴族社会に登場しうる条件を整わせた。仲忠は十六歳で元服をして、藤原仲忠と名乗り、兼雅の息子、一人の殿上人として貴族社会を生きていくこととなる。仲忠は十八歳で侍従となるが、その年の五節の試楽の日、昔俊蔭がかつて嵯峨院に献上した「せた風」の琴を弾いた。またその翌年の八月二十二日、仲忠は兼雅が三条で催される相撲の還饗で一座の期待のなか、弾琴を所望される。父の兼雅に「りうかく風」の琴を勧めれるが仲忠はなかなか弾こうとしない。一方、正頼がついに最愛の九女あて宮を禄にしようと言い出すと、ようやく「りうかく風」に手を触れ、心を込めた見事な弾琴に人々は感激する。その場に居合わせた音楽の達人は左大臣正頼と右大臣兼雅のほか、仲頼、行政や仲澄などの名人たちがいて、それぞれに技巧を凝らし、楽に舞にと華やかな宴を繰り広げ、打ち興じた。それ以来、仲忠は理想の貴公子として貴族社会に才能を認められ、さらに正頼の息子仲澄と兄弟の契りを結んであて宮への接近がより容易になった。やがてあて宮に恋心を抱き、恋文を送る求婚者の一人となった。しかし、あて宮を取り巻く求婚者は多く、主な者だけで十六名にも及んだ。求婚譚の渦中に巻き込まれた仲忠が、如何にその存在をアピールしていくかが物語展開上の面白さである。求婚者たちを次のように名を挙げて紹介しておく。

臺灣大學學術期刊資料庫

1.春宮（今上帝）2.源実忠 3.藤原兼雅 4.中納言平正明 5.兵部卿

の宮 6.源仲澄 (仲純)7.上野の宮 8.三春高基 9.滋野眞菅 10.良岑行政（行正）11.源仲頼 12.藤原仲忠 13.橘忠こそ 14.源涼 15.三の親王（忠康・弾正の宮）16.藤原季英（藤英）

以上の十六名の求婚者の身分から分かるように、『竹取物語』の五人の求婚者と同じく、春宮をはじめ多くの親王や上達部が学問や才能などを持って平等に競争し合えるのである。また『竹取物語』の求婚者のように各々の才能、特色や人物造型などの始末も語られている。『竹取物語』の求婚・難題譚が紙幅の約六割[8]を占めていることから考えれば、『うつほ物語』を長編として構築するにあたり、物語の本筋の展開に沿って十六名の求婚者を描き分ける作者の構想力と筆力には感嘆するほかない。中には求婚者の上野の宮と三春高基と滋野眞菅との三奇人を物語展開と関係付けて物語を長編させる滑稽譚もあるが、これは「単なる滑稽譚としてではなく、『うつほ物語』に描かれた祝祭の表現の一つとして読む必要があろう」[9]と室城秀之氏が指摘している。さらに、妹へのタブー破りの恋の情念を燃え尽くして死んだ源仲純の悲劇にしても、兵部卿の宮（あて宮の叔父）と三の親王（あて宮の甥）の近親者としての求婚行動にしても、「一家離散の哀感と邂逅の感動に満ちた」[10]実忠物語にしても、学者の成功譚として読まれる藤原季英の物語にしても、あるいは、「〈拒否される求婚者たち〉としての存在」[11]と指摘された行政・仲頼・忠こそ・季英の四人も含め、多くの求婚者たちは、ある意味では、この物語にとってそれぞれ特徴的な登場人物として、日本初の長編物語を裏側から支えていると言えるのではないだろうか。

---

8 本文 77 ページの中、求婚・難題譚は 46 ページの約六割を占めている。（野口元大校注『竹取物語』新潮日本古典集成、新潮社、1986）

9 室城秀之（1996）「上野の宮論――『うつほ物語』における祝祭の論理」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房）p.123

10 竹原崇雄（1990）「『宇津保物語』「菊の宴」における実忠物語の成立」（『宇津保物語の成立と構造』）p.73

11 室城秀之（1996）「拒否される求婚者たち――行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって――」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房）p.71

臺灣大學學術期刊資料庫

しかし、『うつほ物語』は、仲忠を中心とする秘琴一族物語が主題の主軸であるとするならば、なぜ「俊蔭」巻の次巻からあて宮を中心とする求婚譚に紙幅の多くを費やしているのか。この点について、河野多麻氏が「長編としての失敗　その一」[12]として次のように指摘した。

> 次に来るべき琴の物語の繋ぎとして書いた筈のあて宮物語の中で、この主題の物語の主人公仲忠を、あて宮の一懸想人にしたのは大きな失敗でした。この主客転倒によって、琴の物語とあて宮物語という二者の融合点を求めた意図が破れ、この二者は却って平行し、両立する結果になってしまいました。

しかし、筆者は河野氏の上述の意見には賛同しがたい。仲忠は「俊蔭」巻以降、あて宮入内と共に求婚譚が一段落を告げる「あて宮」巻まで、あて宮の物語が主軸となる求婚譚の一求婚者にしか過ぎないように見えるが、その中にあって、仲忠とあて宮とを媒介し、繋ぎ止めたのもやはり琴なのである。

また、あて宮からの対応としては、春宮に次いで返歌が多い人物となる。あて宮自身も、

> おぼろけの折にものの音出ださず。されどたまさかに、琴仕まつり遊びなどす。九の君と聞こゆれど、仲忠には御目とどめたまふ。（中略）さればいと心憎くて、をかしき者になむ思しける。（「嵯峨の院」p.321-322）

と、仲忠に目を留めて、まことに奥ゆかしくてすばらしい方だと評価し、心が仲忠に傾斜している。

「祭の使」巻における仲忠とあて宮の次のような接近は、琴の音

[12] 河野多麻（1962）「解説　主題についての二三の考察　長編としての失敗　その一」（日本古典文学大系 12『宇津保物語　三』岩波書店）p .25

臺灣大學圖書館期刊資料庫

色の媒介によるものである。

> 月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出でたまひて、琵琶、箏の琴、おもしろき手を遊ばし、月見たまひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調べよりはじめ、違ふ所なく、わが弾く手と等しくと聞くに、静心なし。身はいたづらになるとも、取りや隠してましなど思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて、(「祭の使」p.502)

と、この接近場面を考えると、仲忠は非常手段を使用し、あて宮と男女の契りを結ぶことは果たし得なかったが、距離を無化した音楽による「音声の共同体」を形成したとは言えるのではないか。そして、この接近を契機として、仲忠とあて宮の愛の物語が終わるのではなく、肉体的距離を保ちながら楽の音色による「愛の共同体」が開放的、並行的に展開しつづけるのである。

求婚譚の結末は、あて宮が春宮に入内し、藤壺と呼ばれるようになった後、あて宮入内後、仲忠はずっとあて宮の後援者として消息を交わしている。勿論、琴の音色による情感交通もある。『うつほ物語』において琴を媒介にして「音声の共同体」＝「愛の共同体」を形成したのは「俊蔭の娘と兼雅」のほか、「仲忠とあて宮」や「俊蔭の娘と朱雀帝(院)」の主役人物である三組の男女間に介在している音楽は、秘琴弾奏を中心に、いつも相手の身体を呼び寄せ、愛を求めている。琴の音色は、相手に愛を求めて鳴り響き、身体を呼び寄せているように聞こえる。その詳細は拙稿[13]を参照していただきたい。

なお、あて宮求婚譚における十六名の求婚者は『竹取物語』の求婚・難題譚の平行展開とは違って互いに恋敵でありながらも、一部

[13] 拙稿(2018)「『うつほ物語』における琴による共同体の形成」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 36 期、pp.1-24

臺灣大學圖書館期刊資料庫

の上達部は琴や音楽に拠る横の連繋、交渉も進行している。『うつほ物語』の求婚譚は、必ずしも河野氏が、

> 十数人もの懸想人をすべて克明に描写することは不可能ですし、数人を除いては影のような存在にしているのも効果的だといえましょう。しかしそれらは単なる人形のような存在で、その上懸想人相互に嫉妬もなく競争もなく各個全く孤立的な点では、竹取物語の類型から一歩も出ていません。[14]

と指摘したような「竹取物語の類型から一歩も」出ていない物語ではない。あて宮の求婚者たちの多様な性格づけ、人物造型や人物関係などは、『竹取物語』の人物描写よりも、さらに人物間の縦横的複線関係が創造されており、今までにない特殊手法としてみるべきものである。あて宮は求婚譚においてもかぐや姫の求婚譚と同じように登場する描写が少なく、大事な場面にしか顔を出さないものの、物語のプロット展開上にその存在が大きく影を落としている。仲忠は「俊蔭」巻以降、求婚譚そのものにはあまり強く関わらないが、音楽と琴とを通したあて宮との関係性は深まっていくほか、一部の求婚者と親友となり貴族社会で強固な友情ネットワークを構築していくのである。

作者に緻密かつ周到な構想力がなければ、あて宮をめぐる十六人の求婚譚は冗長の嫌いを招く恐れもあっただろう。河野氏は「この物語の構想は著しく道義的な儒教的精神が貫いていて、それが親子、夫婦、主従の関係」[15]にも及んでいると指摘するが、実は、『うつほ物語』は親子、夫婦、主従の関係による挿話や物語が見られるほか、仲忠を中心とする人間関係、特に男同士の友情に関する描写が際立っており、友情を主題とする長編物語の「おや」としての一面を、

[14] 河野多麻（1959）「解説　構想と特異性　其一　人間像」（日本古典文学大系 10『宇津保物語　一』岩波書店）p.17
[15] 河野多麻（1959）「解説　構想と特異性　其一　人間像」（日本古典文学大系 10『宇津保物語　一』岩波書店）p.17

臺灣大學圖書館期刊資料庫

筆者は高く評価するものである。

三、

前にも述べたように、仲忠は十八歳で侍従となった年の五節の試楽の日に、十二面の秘琴[16]の「せた風」の琴を弾いた。またその翌年の八月二十二日、相撲の還饗で同じ俊蔭が伝来した「りうかく風」に手を触れ、心を込めて弾いた。仲忠は貴族社会の楽や宴の場を通して、若手の仲頼、行政や仲澄など音楽の達人たちに音楽と琴の才能を認められ、貴公子たちの仲間に加えてもらっただけではなく、政治の中枢にいる源正頼の息子仲澄と、「源侍従の君をはらからと契りて語らふ」(「嵯峨の院」p.320)と深く兄弟の約束をして睦まじく語り合っている。それ以来、仲忠は源正頼家主催、宮中主催あるいは秘琴一族主催の宴や年中行事などの多くの祝祭の場面において、音楽的才能を発揮し、注目の的になる。宴で注目を浴びる人々はほとんどあて宮求婚者であり、良岑行政、源仲頼、源仲澄、藤原仲忠、源涼と、出家した橘忠こそなどの上達部である。しかし、仲澄は同母の妹あて宮に対し、道ならぬ恋路に踏み迷うまま、常に病気がちで公開の場に顔を現さない。ついにあて宮の春宮入内が決定し、悲嘆に暮れて病床に臥してしまい、二十九歳の短い生涯を終えた。

以下、いくつかの宴や年中行事[17]の場面描写を見てみよう。まず「春日詣」巻に、出家した橘忠こそを引き寄せた場面から引用しておく。

(正頼の一族は春日神社に参詣し、盛大な歌会で人々歌を詠む際に)

---

[16] 十二面の秘琴「なん(南)風」、「はし(波斯)風」、「りうかく(竜角)風」、「ほそを(細緒)風」、「やどもり(宿守)風」、「やまもり(山守)風」、「せた(梅檀あるいは瀬田)風」、「はなぞの(花園)風」、「かたち(容貌)風」、「みやこ(都)風」、「あはれ(哀)風」、「おりめ(織女)風」

[17] 学習院大学平安文学研究会(2013)「宴」(『うつほ物語大事典』、勉誠出版)p.800-804
『うつほ物語』の内容に大きく関わる宴や年中行事は六十三カ所もある。

臺灣大學學術期刊論文集

あて宮、かの一条殿のを買はれたるみやこ風といふ琴を、胡茄の声に調べて、こくのめてたといふ手折り返し遊ばす。仲忠、こともなき御琴かな。少しまだ若くぞあんなる。いかならむ世に、わが手習はしたてまつらむなど、心地は空にて思ひたるほどに、かの忠こその行ひ人、(中略)この御前に遊ばす御琴の音する方に向きて、疾き足をいたして走る。(中略)咎めののしれば、ただかくいひて立てり。

(忠こそ)めづらしく風の調ぶる琴の音を
聞く山人は神も咎めじ

といふを、仲忠聞きて、「いと興あるものかな」とて、袍を脱ぎて、かくいひて被く。

(仲忠)みな人も衣脱ぎかけ松風の
響き知りたる人やあるとぞ

うち被けて、御前よりかのみやこ風を賜はりて、同じき胡茄の声を、手を尽くして弾く。(「春日詣」 p .269-271)

正頼が主催した春日詣の歌会は和歌が中心だが、同行者は正頼の子女のほかに婿たち、親王や上達部など、この世にありとあらゆる人も含まれている。その中に兵部卿の親王、藤原兼雅、中納言平正明、宰相源実忠、源仲頼、良岑行政、源仲澄、藤原仲忠など多くの求婚者も参入している。あて宮の弾琴によって忠こそが貴族社会に復帰する挿話ができた。

橘忠こそはかつて橘家が持っていた秘琴「みやこ風」の音色に引かれて正頼一族の前に姿を現し、詠んだ歌の内容によって仲忠に注目された。帝に命じられても決して演奏しなかった仲忠が、自ら進んであて宮の「みやこ風」を借りて同じ曲を思う存分に弾いたので、人々にたいへん珍しく興味のあることだと思われた。それがきっかけとなって、忠こそが正頼と再会して貴族社会に認められ、やがてあて宮を垣間見て、求婚者の一員となった。

一方、「みやこ風」の音色によって知り合った仲忠と忠こその情誼

臺灣大學學術期刊資料庫

は春日詣の歌会に始まり、「石帯」と関わる事情もあって、二人の友情関係が物語の終巻まで、年末に国々から贈られてきた節料を、「入道の君（源仲頼）の御もと、忠君僧都（忠こそ）の御もとに奉りたまふ」（「楼の上　下」p.541）まで続いてゆく。この一節からも分かるように仲忠と仲頼との友情関係も初巻から終巻まで続いているのである。

「嵯峨の院」巻に正頼が主催する十一月の神楽の宴を見れば分かるように、

> かくて、夜更けもてゆくままに、歌うたひ、ものの音、声どもいと豊かに出で来て、高くおもしろきこと限りなし。（中略）ただの遊びの人々、いとになく遊ぶ。仲忠笙の笛、行政ただの笛、仲頼篳篥、あるじのおとど大和琴、右大将琵琶、兵部卿の親王箏の琴、同じ声に調べて、いとになく遊びたまふ。（「嵯峨の院」p.340-341）

と、左右大将（正頼、兼雅）のほか、仲忠、行政、仲頼、兵部卿の親王らの楽器の合奏が比類のないほどである。音楽の合奏が終わった後、すぐ「才名のり」の余興が行なわれるが、中心人物はやはり仲頼、行政、仲忠と仲澄である。源仲頼はすでに「俊蔭」巻に登場したが、「嵯峨の院」巻の途中で改めて素性が明らかになり、宮内卿在原忠保の娘と結婚して満足したように、「この世に経む限りは、さらにもいはず、後の世にもかかる仲に生まれ返らむ」（「嵯峨の院」p.357）などとさえ約束して、五、六年が経ったのに、ある賭弓の饗宴にあて宮を垣間見た後、激しい恋に思い悩み、病床に伏すことになる。あて宮への恋情はやまない時期に、右近衛府の清原松方からの勧めで行政と仲忠を誘って、紀伊国の吹上の浜を訪問する。その際に仲忠は秘琴の「やどもり風」を持参して都のお土産として源涼に贈る。一行が風光明媚な吹上の浜で源涼と出会い、親交を深め、歌を詠み交わし「ものの声かき合はせ、ある限り声合はせ、調子合

臺灣大學圖書館期刊資料庫

はせつつ遊び暮ら」(「吹上　上」p.393-394) している。源涼はようやく「吹上　上」巻で、祖父神南備種松のもとで育ち、容貌が美しいばかりでなく、勉学、音楽、特に清原俊蔭と並ぶ名手と称された丹比弥行に琴を習い、素晴らしい才を持つ人物として紹介される。源涼が「やどもり風」をもらって奏でると、この四人にその演奏の素晴らしさを褒められ、その後も、上巳の祓、藤花の宴、鷹狩などの宴の際に、都の人々を心を尽くしてもてなすことになる。四人の客人たちは帰京するにあたり、種松が豪勢な贈物[18]を用意して人々に贈る。テキストの頭注[19]の注釈にあるように、

> 涼は、仲忠たちに、特に心を尽くした餞別を贈りたいと思う。永遠の別れとなるやもしれぬ気持と、友情の継続をしたいという思いがさせたのだろう。(中略) 餞別の品を記すことで、涼の仲忠たちに対する友情の深さを象徴的に描く。

このように、源涼の加入によって求婚者のライバルがもう一人増えたにもかかわらず、音楽の才能を持つ人々の間に強固な友情共同体が結成されることになるのである。

四、

仲頼が吹上のすばらしい有様と涼の話を嵯峨院に報告したので、興味をもった院は吹上に御幸する。九月一日、嵯峨院一行が吹上の宮に到着されるまで、国境から種松が金銀瑠璃をもって飾り立てて迎えた。すぐさま豪華な食事が用意され、「上、琵琶の御琴、仲忠に和琴、仲頼に箏の琴、源氏に琴の御琴賜ひて」(「吹上　下」p.516) 管弦の演奏が始まった。宴における涼の弾琴の素晴らしさなどが高く評価され、嵯峨院が京へ戻るに際し、共に上京することとなった。嵯峨院は源涼を京に迎えた後、朱雀帝は神泉院において紅葉の賀を

[18] 「吹上　上」p.412～419
[19] 「吹上　上」p.418～419

臺灣大學學術期刊資料庫

主催し、積極的に涼と仲忠に琴を弾くことを求める。管弦の遊びの始まりに、涼と仲忠は「せた風を胡茄に調べて仲忠に賜ふ。はなぞのを同じ声に調べて、源氏の侍従に賜ふ。かしこまりて」(「吹上　下」p.529) 演奏した。同じ場に居合わせた殿上人の中では、仲頼、行政、仲澄も和歌を詠んだり楽器を弾いたりする。更に右大将源兼雅がいきなり、仲忠もまだ見たことのない秘琴「なん風」を帝の前に差し出す。すると、仲忠は、「今は限り、この琴まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは天地おどろくばかり仕うまつらむ」(「吹上　下」p.532) と、決心した。一方、涼は弥行が伝来した琴を献上し、仲忠の「なん風」の秘琴に七人の仙人が調べた大曲に呼応するように、弥行に伝授された大曲を弾いた。二人の秘琴競演は、天象自然の異変と天人が舞い降りるという奇瑞を招来した。この功績を称え、朱雀帝は二人に贈位加階をするほか、「涼にはあてこそ、仲忠には、そこに一の内親王」(「吹上　下」p.535) を禄とする宣旨も下した。

あて宮求婚譚の大きな傘下に依存している求婚者たちは、一人一人物語の表舞台に登場しては、それぞれのストーリーを語り、物語の流れの中で浮いたり沈んだりするほか、いわゆる三奇人を除けば、ほとんど正頼一族の関係性によって仲忠と親交している。特に宴の演奏会の場面はいつも仲忠が衆望を惹きつける人物だけではなく、俊蔭秘琴一族の物語の主題性を持続させるに欠けてはならない者となる。作者は俊蔭が伝来した名のある十二面の琴の行方に、読者に関心を向けさせつつ、求婚譚の中で仲忠の活躍ぶりとともに、秘琴の「りうかく風」、「せた風」、「みやこ風」、「やどもり風」、「はなぞの風」、「なん風」の姿を徐々に再現させた。この上、神泉院の紅葉の賀の宴で、とくに普段他人に見せることを禁じられており、幸いと災いの極限に達したときにしか演奏しない「なん風」と「はし風」の「なん風」の秘琴と七人の仙人の大曲は、源涼との競演により、物語は一大クライマックスを迎えることになる。

昔、俊蔭は日本の朝廷に復帰した後、結婚して一女をもうけ、官

臺灣大學學術期刊資料庫

位も昇進したが、娘は琴の稽古事ができるようになった年に、

> わが身を捨てて習ひし琴、この娘に習はさむと思ひて、かの波斯国より持て渡りし琴どもを取り出でて、二つの琴をば人にも知らせで、いま十を、りうかく風をば娘のにす。ほそを風はわがにて、やどもり風といひしを残して、いま七つを持たせて内裏へ参る。せた風をば帝に奉る。やまもり風をば后の宮に奉る。はなぞの風をば東宮に奉る。みやこ風をば東宮の女御に奉る。かたち風をば左大臣忠経に奉る。おりめ風をば右大臣千蔭に奉る。(「俊蔭」p.41-42)

と、宮中の関係者に差し上げたので、俊蔭の手元に残った琴は名のある五面の琴だけである。

特別な存在の「二つの琴」とは「なん風」と「はし風」とのことで、「りうかく風」、「ほそを風」と「やどもり風」と合わせて、この五面の琴は俊蔭一族四代の命運を繋ぎ、家族の生命共同体を維持させているものである。

「吹上　下」巻以降、一旦あて宮入内(「あて宮」巻)が決定された後、ストーリーは俊蔭秘琴一族を中心とする本筋の軌道に戻る。「内侍のかみ」巻において「はし風」を弾いた俊蔭の娘は朱雀帝(院)との間に男女の「音声の共同体」＝「愛の共同体」が形成されるに至った。さらに『うつほ物語』は最終巻「楼の上　下」で、俊蔭－俊蔭の娘－仲忠－犬宮という俊蔭一族四代にわたる秘琴伝授が完成すると、楼の上で一年間祖母俊蔭の娘に伝授してもらった犬宮の琴芸を披露するため、八月十五夜に二人が楼を下りる儀式として秘琴演奏が設けられる。秘琴「はし風」の音色によって、天皇家も含めた貴族社会の中に一つの音声の最大のコミュニティを確立したのである。俊蔭の予言通り、家族内で伝承用の「りうかく風」と「ほそを風」が大きな役割を果たしたほか、「はし風」も奇蹟的に俊蔭一族の栄華を達成させた。しかし、「楼の上　下」巻に「故治部卿は、ほ

臺灣大學學術期刊資料庫

そを、はし風、二つの琴を立ててのたまひしやう、『世の中、今は限りの幸ひを極め、次にはよにいふかひなくなり、さそらへむ時にを』」（p.593）という一節があるが、筆者がやや不審に思うのは、故治部卿（俊蔭）は「なん風」と「はし風」とを特別に扱っていたはずなのに、なぜ物語の最後では「ほそを」と「はし風」のみが特別化され、「なん風」の方はクローズアップされなかったのかという点である。作者の記憶違いか、他に特別扱いの考慮があったのかは不明だが、神泉院の紅葉の賀の宴に天象自然の異変と天人が舞い降りるという奇瑞を招来した「なん風」の登場の一節、「賜はりて何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。帝よりはじめたてまつりて、大きにおどろきたまふ。仲忠、今は限り、この琴まさに仕うまつり静まりなむや」（「吹上　下」p.532）との内容から分かるように、「なん風」はその場面におけるクライマックスを演じているにもかかわらず、最後のスポットライトは「ほそを」と「はし風」とに当てられているのである。秘琴「なん風」と弥行の琴との加勢によって音楽の芸術性を強調するほか、さらに求婚者の横の繋がりである友情関係も深めていくのである。

五、

『うつほ物語』における宴や年中行事は過剰と言えるほど多いが、そうした場面には、作者の類稀な、特異な構想力と、描写力とが示されている。仲忠は「俊蔭」巻以降、あて宮入内と共に求婚譚は一段落を告げた「あて宮」巻まで、あて宮の一求婚者にしか過ぎないように見えるが、以上のいくつかの宴や年中行事を実際に取り上げて検討するかぎり、あて宮より仲忠の存在感のほうが際立っていると思われる。あて宮は求婚者が求める思慕の相手として美名の存在を広く知られているが、十六人の求婚者のそれぞれの物語や挿話に分割、分散され、また多く出された相聞歌にも稀にしか返歌を与えないので、かぐや姫のように静的で、影の薄い存在である。求婚者の一員にしか過ぎない仲忠は、かえって公私にわたる宴や年中行事

臺灣大學學術期刊資料庫

で音楽と琴のすばらしさを媒介に活躍ぶりを見せるほか、多くの親王や上達部と友情を深めていく。物語における宴会や歌会から分かるように、すでに友情関係を結んだ仲頼、行政と仲忠三人は、あて宮へのタブーの恋に思い悩んでいる仲澄を残して、同じ恋の悩みを抱えたまま、鬱憤晴らしをするため都を離れ、異空間の吹上の浜で源涼に恵まれ、いっそう強固な友情共同体を結成することになる。とりわけ、「吹上　下」巻での神泉院の紅葉賀は、涼の琴の才を仲忠と対抗させ、涼を仲忠の競合者として位置づけただけではなく、内包されている仲忠と涼の友情関係も明白に看取できる。さらに、以下「吹上　下」巻以降の二人の交情の一部を、取り上げてみれば分かるように、二人が音楽による友情共同体はすでに切っても切れぬほど強く築かれていると言っていい。

「内侍のかみ」巻で、仲忠は、相撲の節会の日に帝に弾琴を指名されたが、辞退して藤壺（あて宮）のもとへ逃げ、あて宮との間、和歌による露骨で親密な交流（「内侍のかみ」p.213-215）のほか、仲忠を探しに藤壺へ来た涼とも、

> 涼、「大将のおとど、召す使にさされたまひつめるは。それをばすまひたまはじかし」。仲忠、「今宵は親も子も知らじ」。涼、「御前にて御琴賜はりて、責めそせさせたまへるに、困じにたりや。あが君の御徳にこそ、まかり出でぬれ」。（仲忠）「仲忠が徳には、さのみこそはうれしげなけれ」など物語しつつ、内より浅香の折敷どもに、肴いと景迹にし出だされたり　。（「内侍のかみ」p.216-217）

と、あて宮の側近で親しい友人としての交誼の会話を交わした。

あて宮は最終的に春宮へ入内したので、がっかりした求婚者たちの一部の人々は左大将源正頼の婿に取られた。そうした中で、仲忠は朱雀帝の女の一の宮と、涼は正頼と大宮の十四の君であるさま宮と結婚することになる。ちょうど結婚三日目の十五夜の宮廷宴で、

臺灣大學圖書館期刊資料庫

仲忠は俊蔭伝来の「ほそを風」を、涼は弥行が唐土から持ち帰った「十三千」を弾く。

> 涼、仲忠、久しくありて、楽心とどめて仕まつる。神泉のなん風は、おどろおどろしく声大にして、今宵のほそを風は、高くいかめしく響き、静かに澄める音出で来て、あはれに聞こえ、細き声、清涼殿の清く涼しき十五夜の月の隈なく明かきに、小夜更け方に、面白く静かに仕うまつる。帝よりはじめたてまつりて、涙落とさぬ人なし。(「沖つ白波」p.290)

そのほかに、

> 大将（仲忠)、「まことや、聞こえむとしつることは、明日御車賜へ」。源中納言（涼)、「何々の御料にぞ」。(仲忠)「女三の宮、三条に迎へたてまつる料なり」。人々いみじく喜び驚きたまふ 。(「蔵開　下」p.540)

と、仲忠は、父兼雅の代わりに嵯峨院の女三宮を迎えに行くため、親友の涼から牛車を借りたり、立太子争いの嵐を避けるため、涼などの仲間を誘って「ほそを風」を持参して、一緒に出家した仲頼を訪ねて水尾へ赴いたり（「国譲　下」p.298-314）する。

物語の最後の「楼の上　下」巻で、三条京極邸の十五夜の宴で、俊蔭の娘は「りうかく風」、「ほそを風」に引き続き、「はし風」を演奏して奇瑞を起こしたところ、気分が優れず、演奏を中断した。そして、自分が弾いているように装って、いぬ宮に「りうかく風」を弾かせ、その腕を試そうとするが、その音色の変化にすぐ朱雀帝に「変はるなるは」(「楼の上　下」p.606）と気付かれたほか、

> 大将(仲忠)のみぞ、人知れずあやしと思ひたまふ。源中納言(涼)の、「あやしく、りうかくの声は、暁なれど、少しこそ変はれ。

臺灣大學學術期刊資料庫

このかうざまの音は、大将は同じやうに、え伝へたまはざりけることかな」（「楼の上　下」p.606）

と、仲忠自身は無論、涼にも音の変化を察知される。仲忠と涼との親交関係は、『呂氏春秋』「孝行覧・本味」における伯牙と鍾子期の「鍾子期死するや、伯牙琴を破り、弦を絶ち、終身復た琴を鼓せず、以爲へらく、世に復た爲めに琴を鼓するに足る者無し」[20]というほどの「知音之交」ではないが、お互いは琴の音色を聞き分けることのできる「知音の友」になったと認められよう。

柳瀞先氏が指摘したように、「物語の前半部に内在していた仲忠と涼の友情関係は、後半部になると、仲忠の好敵手としての涼像の後退とともに、あらためて表面化していくことに」[21]なり、「吹上　下」巻以降の涼は、仲忠との対比の中で語られ、俊蔭一族の秘琴の物語に内包されていく形となるが、二人の親交関係は物語の最後まで継続し、仲忠が織り成した友情共同体の最も重要な役割を果たすことになるのである。

【付記】中華民国科技部の専題研究計画「日本平安時代《宇津保物語》中的琴與音樂(二)（日本平安時代『うつほ物語』における琴と音楽(二)」（MOST 107-2410-H-030-012-）補助金を受け、書き下ろしたものである。

20 『呂氏春秋』「孝行覧・本味」
国訳漢文大成 国立国会図書館デジタルコレクション（呂氏春秋の和訳および原文掲載）
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/965862?tocOpened=1
呂氏春秋（中国語版） 中文電子テキスト（中國哲學書電子化計劃）
https://ctext.org/lv-shi-chun-qiu/ben-wei/zh
「鍾子期死，伯牙破琴絕弦，終身不復鼓琴，以為世無足復為鼓琴者。」
(ある時に鍾子期が死んでしまったあとは、伯牙は、琴を壊して弦を切ってしまい、それから死ぬまで、二度と琴を演奏することはありませんでした。世の中には私の音を聞いて、きちんと私の気持ちまでもくみ取ってくれるような人間はもういないのだと、伯牙は思っていたからです。)

21 柳瀞先(2001)「『宇津保物語』の仲忠と涼の人物造型――琴の才の視点から」（『日本文学』50巻二号）p.6 上

臺灣大學圖書館期刊合訂庫

【参考文献】

A. テキスト

中野幸一 校注・訳(1999～2002）新編日本古典文学全集『うつほ物語①～③（全 3 巻）』小学館

B. データベース

「新編 日本古典文学全集」
（知識探索サイト ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain

国訳漢文大成 国立国会図書館デジタルコレクション
（呂氏春秋の和訳および原文掲載）
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/965862?tocOpened=1

呂氏春秋（中国語版） 中文電子テキスト（中國哲學書電子化計劃）
https://ctext.org/lv-shi-chun-qiu/ben-wei/zh

C. 専門書籍と機関誌論文（出版年代順）

河野多麻（1959）「解説」『宇津保物語一』日本古典文学大系 10、岩波書店

河野多麻（1962）「解説 主題についての二三の考察 長編としての失敗 その一」日本古典文学大系 12『宇津保物語 三』岩波書店

中村真一郎（1985）『色好みの構造--王朝文化の深層--』岩波書店

三谷栄一（1986）「宇津保物語 総説」『鑑賞日本古典文学第 6 巻 竹取物語・宇津保物語』角川書店

竹原崇雄（1990）「『宇津保物語』「菊の宴」における実忠物語の成立」『宇津保物語の成立と構造』

片桐洋一、高橋正治、福井貞助、清水好子 校注・訳（1994）『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館。用例検索は. データベース「新編 日本古典文学全集」（知識探索サイト ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain に拠る。

室城秀之（1996）「上野の宮論――『うつほ物語』における祝祭の論

臺灣大學學術期刊資料庫

理」『うつほ物語の表現と論理』若草書房
猪川優子（1997）「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉―「繋がり」の形成をめぐって―」『古代中世国文学』9号、広島平安文学研究会
柳瀞先（2001）「『宇津保物語』の仲忠と涼の人物造型――琴の才の視点から」『日本文学』50巻二号
学習院大学平安文学研究会（2013）「宴」『うつほ物語大事典』勉誠出版
拙稿（2018）「『うつほ物語』における琴による共同体の形成」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第36期

臺灣大學學術期刊資料庫